

柳田 聖山 著

## 初期禅宗史書の研究

横 超 慧 日

花園大学教授柳田聖山氏は、禅宗の燈史を研究してかかてより着々と堅実な業績を発表せられてきたが、昨年はほぼその成果を集大成した形に於て「初期禅宗史書の研究」という全文七百頁に余る労作を公にせられた。この書は、同教授が兼ねて研究員として参加されている禅文化研究所より、開設後三年を経てその研究報告の第一として世に問われたものである。禅文化研究所にとっても又花園大学にとっても、禅宗初期の実態を明確にすることとは最も重要な使命であるこというまでもないが、私は本書が千年に亙る禅宗の宗学的伝承説の上に徹底した学問的照明を投げかけられた点に於て、これが独りそれらの機関のため忠実に使命を果たされた結実であるからというだけでなく、広く学界全体の上から言っても、確かに今日の佛教学が誇り得る後世への一遺産であると信ずる。私は研究に於てその方面を専攻してきた経歴を持たず又今十分の調査に立つて批評するだけの餘裕もないのであるが、同書の刊行に喜を覚えるのでここに内容一端を紹介すると共に併せて卑見を申し述べる

ことにしたいと思う。

「禅宗」というのは、周知の如く見性を重んじ不立文字を標榜する宗派である。見性を宗とする以上は各自の内的直観を通さねばならず然も直観し頓悟するためには禅機の発ることが必要であつて、禅機はよき師の導きにより人格の触れ合いの中に育成されるものである。そこで禅宗では師弟の關係がとりわけ重視せられ、師の日常生活における一挙手一投足が悉く悟りに繋るものであるとせられた。これが禅家に於て、語録というものの次々と編纂されてきた所以である。同時に又法のために師を重んじ見性が師の開導に俟つことの実証として、又その実証が後の求道者を開悟に導く最良の手引となる意味に於て、及び一面には自派の嫡々相承が正しく佛祖に結ばれるものであることの保証として、伝燈の系図が漸次積み重ねられていった事情も、禅宗というものの性格上これは当然のこととして肯かれるのである。然るに従来は禅宗の歴史を論ずる場合に語録や伝燈録を資料とし、そこから直ちに史実の記録を求めようとするのがおおかたの態度であつた。史実の客観的な記述を意図したものでないところの文献に対し、その本来の目的を無視した利用がなされるところすれば、ここに正しい意味の禅宗史が求められるかどうか。それは言うまでもない所である。

今柳田教授の研究は、そうした点に対する根本的反省から出発している。即ち資料をとりあげる場合に、それが如何なる人々によってどういう目的のために遺されたものであるかという検討を第一に志している。第一章第二節の、「唐代佛敎史料と

しての燈史の意義」という中で次の如く論ぜられている。

……先ず燈史資料そのものの性質と、その成立に関する歴史  
的検討を前提しなければならぬ。而も、茲に「原初の形」  
と言うのは、歴史的時間的な原初ではなくして、意味的内包  
的な原型を指す。いったい良心的な歴史研究に際して、資料  
の古さが尊ばれるべきは言うまでもないが、古いものが必ずし  
も信用できるとは限らぬし、特に宗教関係の文献には、常に  
史実と伝承がからみ合つて居り、伝承的な記述を直接無批判  
に史実と誤ることの警戒と共に、伝承を単なる虚構として捨  
て去つて顧みぬ愚を反省すべきである。宗教的な伝承や説話  
の発生は、決して恣意的偶然ではない。寧ろ其等の伝承が生  
み出される歴史的社会的意味や、心理的文学的な理由をつき  
とめねばならぬ。

まことに教授が言われるごとく、宗教上の文献に於ては、伝承  
されたものの記述を直ちに史実の記録と誤認するような無批判  
は敵に警められねばならぬのであつて、この点は古来の禪宗史  
家が往々に犯した過誤を強く衝いたものと言つてよい。然しさ  
らばと言つて、それを直接に史実の記録でないからという理由  
で虚妄視したならばどうなるか。それは伝承説を表面的に事実  
の記述と見る誤は避けられたとしても、伝承説発生の意味する  
ものを見失つたものと言ふべきで、真相を反映する適切な資料  
に直面しながらその見方を知らぬために却つて自ら顔をそむ  
けるという結果に陥る。教授はこの点に深く留意し、洞察の眼  
を鋭くそこに注ぐことを忘れなかつた。前に引いた文章はその

用意を端的に表明しているものであり、本書の底に流れるもの  
——本書をして学問的に生命あらしめたもの——は実にそこに  
在つたのである。これについての意見は又次の如く論ぜられて  
いる。

かくて、燈史の書は決して単なる歴史的事実を記したもので  
はなく、寧ろ宗教的信仰的な伝承の表現である。其らは作  
られたものと言ふよりは、歴史的に生み出されたものである。  
言わば、伝承的な説話の一つ一つに、敢えて虚構と言ふなら  
ば、虚構される必然的な理由を内包しているのである。従つ  
て、此処では逆に歴史的事実そのものまでが、すでに説話的  
な意味を以て記録されいとも言える。所謂、史実でない  
からという理由で、其等の説話を一概に否定し去るだけなら  
ば、すでに燈史を読む資格はないと言ふべきである。燈史が  
史実を伝えるのみのものでないことは、そもそも自明の前提  
だからである。寧ろ虚構された記録の一つ一つを、丹念に吟  
味してゆく過程に於て、逆にそれを虚構した人々の、歴史的  
社会的な宗教的本質を明らかにし得るのであり、所謂史実と  
異つた別次元の史実が、歴史的に洗い出されてくるのでなか  
らうか。燈史の虚構は、あくまで燈史の本質であつて、単な  
る方便や表現の偶然ではない。

まことに先人の虚を衝いて正に射あてた精論というべく、  
この根柢に立つて進められた本研究が従来の類書と撰を異にし  
るものであること、すでに上引の文だけでも想像に難くない  
であろう。

以上の用意を以て論究せられた本書は、次の如き六章より成る。

## 第一章 問題の所在

## 第二章 北宗に於ける燈史の成立

## 第三章 南宗の擡頭

## 第四章 祖師禪に於ける燈史の発展

## 第五章 宝林伝の成立と祖師禪の完成

## 第六章 餘 論

初めに問題の所在を論ずる第一章では、「統高僧伝」の検討から始まる。「統高僧伝」は貞觀十九年における成稿の後道宣によりその入寂までの二十三年間に互って加筆増補を加えられたが、そこで増補された人々というのは習禪や明律・感通の諸篇に属する人々であるという事実に着目し、その背景の意味するものが注目された。そして唐の道宣の入寂から三百二十余年を経て出来た宋の贊寧の「宋高僧伝」では、道宣が晩年に苦慮して増補した習禪・明律・感通等の諸篇の増大化という傾向を更に極端に明確化して引きつがれており、これは禪や律の如き実践佛教が、道宣に於て若干注意はされながらも終に予想し得なかつた所まで大きく変質したことを物語するという。こうして「統高僧伝」より「宋高僧伝」への中間期こそは、正しく中国佛教史の後半を大きく変えた禪宗にとってその形成段階であったことを強調する。本書は従つて、「統高僧伝」より「宋高僧

伝」に至る間に点在する燈史群は無限の課題を含むものとして唐代佛教の生ける体質を示すものと判断し、その観点に立ちそれらに對し逐次精密な検討を加えるという形に於て研究が進められているのである。

第二章以下は第一章で指摘された問題を解明していった実績である。今一々の論証過程を紹介することを省き、その中でとりあげられた資料文献の名を見てゆくならば次の如きことになる。即ち第二章では、「唐中岳沙門釈法如禪師行狀」と「唐玉泉寺大通禪師碑銘」とをまっさきにとりあげることによって燈史の発端を見出し、達磨以下・恵可・僧璨・道信・弘忍・法如・神秀という七代伝法の承譜が主張された「伝法宝記」、及び達磨系の新しい佛教の流れを楞伽主義に於て前進させた「楞伽師資記」について詳論する。そのようにして北宗に於ける燈史の成立を跡づけた後、第三章では古本「六祖壇經」を中心に南宗の擡頭を論じ、第四章では、「曹溪大師別伝」、及び敦煌本「六祖壇經」・「歴代法宝記」等によつて祖師禪に於ける燈史の発展を詳説する。そして第五章では西天二十八祖説を確立した「宝林伝」を以て祖師禪の完成と見てその内容影響を論述しここにいわゆる中国初期禪宗の基盤が漸く決定を見たとするのである。

従来中国初期禪宗史の研究は、殆んど「景德伝燈録」や「五燈会元」を史料として行われていた。然るに敦煌資料の多量な発見によつて禪宗史の分野に於ても多くの新しい資料が提供されるに至り、又国内でも「宝林伝」や「祖堂集」、興聖寺本

「六祖壇經」等の古逸書が知られるようになったので、資料の急増は学問全体に対しても新しい角度から見直されるべき批判的歴史研究を促した。これによって内外の史家・佛家が今ここに著者によってとりあげられている資料をすでに夫々研究の領域に持ち込まれたのであって、それら先人の功も固より没することはできぬ。中でも、中国の胡適博士と欧米に禅思想を紹介した鈴木大拙博士を初めとし、松本文三郎、宇井伯寿、常盤大定等の故人より、近くは水野弘元、関口真大等の諸氏に至るまでこれらの先輩により開拓し継承し検討を加えられた努力は陰に陽に今日の柳田教授をして統一ある成果に導いた原動力である。そうした先人の功については何人も否定し得ぬ所であり、著者自身もすでに詳細な論及によりそのことを明白に認めておられる所である。そして、それ故にこそ、又それらを集大成しつつ独自の見識により統一的な発展の相に於ての初期禅宗史の構造が成ったのであった。注記に見出されるおびただしい関係論文の涉猟は、たしかに禅宗史の今後の研究が本書を起点としてなされるべき意義を種々の観点から実証するものと言っても過言ではないであらう。

著者柳田教授に従えば、「統高僧伝」の習禅篇には達磨と僧可の二伝を取め、達磨伝には道育を附伝し、僧可伝には僧那・慧滿等の七人を附伝する。然し、僧可伝は胡適博士に指摘された如く、前半の慧可その人に関する部分と後半の附伝との間に矛盾があって、四卷楞伽の伝持に関する記載は恐らく道宣が晩年に得た知識であり、それは法冲系の楞伽の宣揚者たちの記事

と同じ性質のものと思われる。従って、僧可伝に対する七人の附伝のうちの少くも楞伽に関係ある僧那・慧滿の二伝も当初の統高僧伝の中に存していたかどうかは疑わしいと言ひ、先ず「統高僧伝」中で、達磨・慧可に関して最初に記述せられてあった部分と増補でとりあげられた部分との区別から問題解決の緒が求められる。そして追加分たる感通篇の中の法冲伝に於て楞伽經の宣揚者としての法冲が達磨・慧可の系統に属する人であることが明らかにされているのを指摘し、法冲伝によって慧可・璨禅師の系列は見えるが、一方道信と弘忍との法系がそれとどのように繋るかは明かでないとする。即ち「統高僧伝」の道信伝と「宋高僧伝」の弘忍伝とは、資料として三百二十余年の距りがありながら師弟の関係を以て結ばれているが、その道信―弘忍の関係をどのようにして僧可―璨の系統と繋ぎ得るか。その問題が今日の禅宗伝統の系譜をたどる源泉となるのである。著者はこの源泉を弘忍の弟子法如の「行状碑」の中に見出し、そこに達磨―慧可―僧璨の三代と道信―弘忍の二代とを結ぶ五代の伝持の系譜があることを確かめ、これが後に限りなく発展する燈史の発端であることを明かにする。この点は著者が昭和二十九年の「日本佛教学会年報」第十九号に「燈史の系譜」として発表して以来論じて来た所であり、そういう意味からすれば本研究は十五年来の研究がその結実大成を得たものと言ってよく、その間の足跡が一步一步とそれ以後の跡づけをたどってきたのであった。以下の詳論紹介は今これを略する。一々の点に関する論証の精確・当否について、具体的に評することはそ

の道の専門学者に委すことにし、私は本書の論述の表面について以下二三気づくままを附言してこの紹介を終ることにしたい。

一、附録として、「法如行状」、「大通禪師碑銘」、「浄覚師碑銘」、「光孝寺瘞髮塔記」、「六祖能禪師碑銘」、「伝法宝記」及び浄覚による「注般若心経」と、「楞伽師資記序」との合して八篇の校注が百五十頁の分量を以て収められている。各篇みな校合に用いたテキストの出処とその資料価値を究明し、万全の用意が払われているが、特に注記に至っては地理及び史実等に関する史的考証に於ても、文意解説のための故事出典の搜索に於ても、殆ど申分のないまでに周到な解説及び研究がなされている。凡そ資料は単に部分的に必要な箇所のみを根拠を示せば足るというものでなく、その資料全体が、必要と気づかれなかった部分に於ても意外な価値意義を含むことの、後になって他の機会に見出されることがしばしばあるものであるから、全体に互って隅から隅まで限なく知悉しておくことを要する。そうでなかったならば、資料が論者にとって好都合な意味にのみ部分的に採用せられた結果、逆な意味若しくは全く見当違いの説として完全に論旨を崩壊させる危険なしとしない。この点に関し、著者の配慮は正に万全を期していると評しても過言でないであろう。

二、索引の懇切なることも、また本書の特筆に価する所である。索引は(一)人名(佛・菩薩・研究団体を含む)、(二)地名・寺名、(三)書名(碑銘資料を含む)、(四)事項、(五)語句、(六)文献、(七)全唐文及び敦煌写本資料一覧の七種に分けられている。索引の

みで五十三頁に及び、量的にもこれに払われた労の並々ならぬことが察せられるが、人名・地名・書名等の他に事項と語句と文献の索引を設けられたことはその語彙の採択等について若干問題はあるとしても、利用の仕方如何によっては研究者に便宜すること莫大であろう。

三、その他巻頭には二十三の図版があり、「法如行状」の拓本を初め、「大通禪師碑銘」、及び敦煌写本のペリオ本及びスタイン本による詳細の資料が提示されている。これらは附録の資料校注と相俟って本研究の根拠を確実ならしめるものであり、本文第六章の餘論は、祖師禪の変貌・禪と禪宗・禪宗の本質という問題について結論的な論述を展開しているのと前後照応していると思われる。

最後に柳田教授をしてこの成果あらしめた協力者や師友の力を見ることができぬが、私は教授がかねてより中国文学の専門学者である名古屋大学の入矢義高教授と多くの仕事を共にし、これによって中国文献に対して宗門学者にあり勝ちな牽強附会の解釈に陥ることから免れて本格的なとり組み方を示唆される所が大きかったと想像し、陰の力的一端を附記して本稿を終ることとする。労作に対して表面的な紹介に終り学問的専門的な詳評のできなかったことを、著者並びに読者に対して申訳なく思うことである。

(昭和42年5月刊、法蔵館 A5、四・五〇〇円)